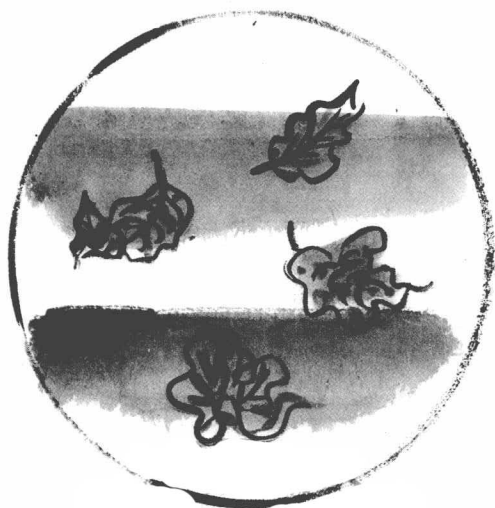


蕩兒歸鄉

丹羽文雄

蕩兒歸鄉

丹羽文雄



中央公論社

蕩児帰郷

九八〇円

昭和五十四年十二月一日印刷
昭和五十四年十二月十日発行

著者 丹羽文雄

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六二)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七九

目次

顔の小さな孫娘

仏の樹

贖罪

晒しもの

父子相伝

旅の前

帰郷

あとがき

5

39

65

105

129

149

189

214

蕩兒
歸鄉

顔の小さな孫娘

夜の十時ごろ、たき子の家の前にバトカーがとまった。やしき町なので、この時間には人通りがない。車から三人の警官が下りた。玄関のポーチには、灯がともっている。家人が眠っているなら、灯は消えているはずであった。警官は家の中の気配に耳をすませた。何の物音もしなかった。ひとりが呼鈴を押した。ブザーが家じゅうに鳴りわたるのが感じられた。

たき子のあさい眠りが破られた。サイド・テーブルの時計をみた。主人はまだ帰宅していない。今夜のかえりのおそいのは、会社からの電話で承知している。主人なら合鍵ではいってくるはずだった。たき子が寝室を出ると、リビングルームに灯がともっていた。たしかに消したはずである。リビングルームの長椅子に、三つ四つぐらいの等身大の女の人形がたてかけてあるように見えた。うすい水色のスリーピング・バッグを着て

いる。その人形が動いた。

「千萩、まだ寝てなかったの」

早くから千萩はベッドにはいつていた。

「いまごろお客さん？」

と、千萩がきいた。

「たれかしら、こんな時間に……？」

客好きの千萩が、リビングルームから出てきた。たき子は、玄関の鍵をあける前に、ミラクル・アイをのぞいた。警官が三人立っていた。たき子は、目を疑った。とっさに事態がのみこめなかった。

「いまあけます。しばらくお待ち下さい」

夫が事故にでも遭ったのではないか。呼吸をととのえるどころか、大きく胸騒ぎがした。扉をあけると、三人の警官が一斉に拳手の礼をとった。

「どういう事態でしょうか」

ひとりが訊いた。

「どういう事態って……何のことですか」

「何か変わったことはおこらなかつたですか」

「いいえ、べつに、何も……」

長男の毅は、自室のベッドで眠っていた。その兄の部屋よりはすこし小さいが、千萩の部屋のベッドはまだ幼児用のものであった。ベッドに柵がついている。四歳を迎えたばかりの千萩は、自由に柵がのり越せるようになっていた。

「主人は今夜すこしおそくなると電話がありました。でも、もうそろそろかえってくる時間です。何も変わったことはありません」

警官はたき子の説明をききながら、室内の気配にするどく耳をすますようすであった。「おまわりさん、白い自動車にのってきたの」

と、千萩が母親の腰にまわりついて、興味あり気に訊いた。ひとりの警官が、うなずいた。

「何ごともなければ、いいのですが、電話があつたものですから、急遽かけつけたのです」

「どこからの電話ですか」

たき子は、気味悪くなった。

「おそばやさんです。田沼さんのところに、何か変わったことがおこったらしい、すぐにいってくれという電話でした」

「おそばやさんですか。三河屋さんですね」

「そう、三河屋です」

千萩は、いつものように母親が客をロビーに案内しないのを、不思議がった。それを責めるように、母親の顔を仰ぎみた。

「子供をベッドに入れてから、九時すこし前でしたから、私もベッドに上って、ついうとうとしてました。この子の兄は眠ってます。他にだれもいません。だれがいったいおそばやさんに、電話をかけたんでしょうか」

たき子の頭に、ひらめくものがあつた。

「千萩ね？ 千萩がおそばやさんに電話をかけたんでしょう？」

しかし、千萩は三河屋の電話番号を知らなかった。だから教えられていなかった。千萩には数字の観念がなかった。兄の年齢も、近くにゐる二人の年上のいとこの年齢も、よく知らなかった。自分より年上という現実感だけであつた。が、田園調布のいとこの年齢だけは、知っていた。武則は二歳であつた。千萩は、武則が好きである。武則に向

うと、自分が万事姉さんぶることが出来るからだ。千萩は今夜、突然武則を思い出した。それで田園調布に電話をかける氣になった。

柵のついているベッドで眠っていたが、喉がかわいたので、目をさました。

「マミ、お水ちょうだい」

と、叫んだが、母親の寝室はすこしはなれていた。母親がリビングルームでテレビをみていたにしても、千萩のベッドからは扉に遮られて、声がとどかない。千萩はベッドを下りた。リビングルームをあけたが、灯が消えていた。母の寝室にはいった。大人のベッドは、胸のところまでしか届かない。

「マミ、マミ」

何度も声をかけたが、母親は目をさささなかった。手をのばして、母のからだを叩いたが、からだにさわらないので、目をさましてくれなかった。マミが酒をのむと、ぐう眠ることを千萩は知っていた。

——マミは死んでいる！

と思った。手ごたえがないからである。千萩にとっては、それは死とおなじことであった。千萩はリビングルームにはいつて、スイッチをひねった。武則を思い出したのは、

このときであった。

——そう、知らさなければならぬ。

という気持ちもあったろうが、義務感というよりは、武則だけに現在自分が当惑している状態を知ってもらいたかった。千萩は、プッシュ・フォンを押した。受話器を耳にあてていると、大人の声が出た。

「三河屋ですが」

千萩はびっくりしたが、その大人の声にはききおぼえがあった。台所でたびたび話合ったおぼえがあった。

「どちらさまですか」

千萩はだまっていた。

「どなたですか」

「千萩よ」

と、答えた。相手は、幼い声と判断したようであった。

「チハギちゃん？ チハギちゃんですね。すると、田沼さんところのお嬢さんですか」

「そう、あたし、田沼千萩よ」

「どうしたんですか、こんな時間に？ お母さんは？」

「マミ、死んじゃったの」

「お母さんが死？ あっ、もしもし、千萩ちゃん、千萩さん」

電話ががちゃんと鳴って、切れた。これまで三河屋は、田沼家の幼い娘から注文をうけたことがなかった。三河屋は、とうに看板になっていた。この時間に注文のあるはずがなかった。が、三河屋も子供のいたずらとしてすますことが出来なかった。いたずらにしては、悪質すぎる。田沼家にいま何かがおこっている。それはたしかであった。幼い子供がこのような時間に母親の死を死らせるなど、それだけでもただごとでなかった。三河屋は警察署に電話をした。

「わかりましたわ。申訳ありません。この子がまちがって、おそばやさん呼び出したのです。多分おばあちゃんとこにかけるつもりで、プッシュ・フォンを押しそこねたのです」

母親が恐縮しきって、つづけさまに頭を下げるのを仰ぎみながら、千萩は訂正したい衝動をつよく感じた。マミは、ひとり合点をしている。電話をかけたかったのは、武則のところであったといったかったが、大人の会話や、笑い声にじゃまされて、口がはさ

めなかった。

「いや、何ごともなく、結構でした。電話をうけた以上、署としても、だまってすますわけにはまいりませんからね」

「何とおわびしてよいかわかりません。申訳ありません」

警官たちは、気を悪くしていなかった。

「何ごともなく、よかったです」

「主人がかえりましたら、あらためておわびに参ります。こんな時間にご心配をおかけして、ほんとうに申訳ありません」

警官たちは玄関を出ていくとき、

「お休み、お嬢ちゃん」

「バイバイ」

と、千萩が手をふった。

やがてパトカーは、音を残して走り去った。警察署は、大通りを越した向うにあった。あんまり近くにありすぎた。

「千萩は、おばあちゃんここに電話をかけるのを、まちがって押したのね。千萩は、お